

3. 医学部

(1) 医学部の教育目的と特徴	3-2
(2) 「教育の水準」の分析	3-3
分析項目Ⅰ 教育活動の状況	3-3
分析項目Ⅱ 教育成果の状況	3-16
【参考】データ分析集 指標一覧	3-19

(1) 医学部の教育目的と特徴

教育目的

福井大学医学部は、理念「愛と医術で人と社会を健やかに」に基づき、人間形成を基盤に生命尊重を第一義とする医の心の態度を体得するとともに、世界水準の医学及び看護学の知識と技能を修得し、地域社会や国際社会で活躍できる医療人及び研究者を育成する。

医学科： 確かな知識と技能に基づく質の高い臨床能力と、生命尊重を第一義とする共感力と倫理観を有し、根拠に立脚した患者中心の医療を実践できる医師や、医学の進展に貢献する高い能力を身につけた医学研究者を育成し、医学・医療の進歩を通じて社会に貢献することを目的とする。

看護学科： 高い倫理観と良識ある人間性を有し、科学的根拠に基づいた看護を実践でき、知識・技能を生涯にわたり修得し続ける高度専門職業人を育成し、看護学の発展と地域社会に貢献することを目的とする。

医学部の特徴

医学部は 1980 年開学の旧福井医科大学を前身とし、1997 年に看護学科が設置され、2003 年に旧福井大学と統合し現在の医学部が発足した。これまでに 4,757 名（2019 年度末）におよぶ優れた医療人を育成し福井県はもとより全国各地に送り出し、広く社会に貢献してきた。福井県内をみると、医師として 624 名の医学科卒業生（県内医師の約 3 割）、看護師・保健師・助産師として 349 名の看護学科卒業生が従事しており、地域医療に高く貢献している（2019 年度）。医学科（現定員 115 名）では前期、後期及び推薦、編入、看護学科（現定員 60 名）では前期、後期及び推薦による入試により入学者を選抜している。第 3 期では、両学科とも入学定員を満たしており、推薦枠入学者を中心として県内高校出身者は医学科では約 22%、看護学科では約 67%を占める。

重要な取組

福井大学第 3 期中期目標を踏まえ、①（中期目標 I-1-1）高い国際通用性を有する教育課程及び地域一体型教育により高度専門職業人の育成のため、医学科看護学科ともにアウトカム基盤型教育の導入による国際通用性ある教育課程を構築し、独自かつ先進的な ICT システム（臨床教育支援システム CESS）の開発と利用により臨床・臨地実習の充実を図り、②（中期目標 I-1-2）質の高い教育を実現するための教育実施体制の整備のため、医学部附属教育支援センターを中心とした教育の内部質保証体制の拡充と医学看護学教育の外部評価等を通じた教育 PDCA サイクルの実質化を図り、③（中期目標 I-1-3）ステークホルダーの満足度が高い修学支援、生活支援、留学支援等を実施するため、医学部学生統合データベースに基づく学生個人の e-ポートフォリオによる学修成果の可視化と学修支援に努め、④（中期目標 I-1-4）知識・能力・意欲・適性等の多面的・総合的評価による多様な学生の受入を進めるため、教育 PDCA サイクルに基づく入学定員の見直し等を積極的に進め、⑤（中期目標 I-3-1）地域の知の拠点として地域の人材養成に寄与するため、地域医療教育や COC+事業を通して地域社会で活躍する医療人の育成を進め、もって教育の質向上を図ることを重要な取組としている。

(2) 「教育の水準」の分析

分析項目 I 教育活動の状況

<必須記載項目 1 学位授与方針>

【基本的な記載事項】

- ・ 公表された学位授与方針（別添資料 3903-i1-1）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 医学部は卒業時における教育の質保証に取組み、2016年度に「福井大学医学部理念」に関する意見を医学部教職員及び学生等から募り「愛と医術で人と社会を健やかに」と定めた。「理念」には“真理を探究する知への愛”“人命を尊重し人間に共感する人への愛”の意味が包含され、福井県及び福井大学医学部（前身の福井医科大学を含む）の歴史を踏まえたものとした（別添資料 3903-i1-2）。2017年度に「理念」に基づき「医学部の教育目的」「医学部の人材育成目標」を改定し（別添資料 3903-i1-3）、医学科は2018年度、看護学科は2019年度から「理念」「教育目的」「人材育成目標」と整合性を持ちかつ体系性を有する教育プログラムである「アウトカム基盤型教育」を導入した（別添資料 3903-i1-4）。「学位授与方針」（ディプロマ・ポリシー、以下DPという）は、医学科全教授・看護学科全教員参加のワークショップで意見交換を行い、「理念」の具体化と卒業時の学修達成状況から教育分析を行うPDCA体制（教育IR活動）の強化の両面を目的に、医学科は従来の4項目から36項目（3項目のアウトカムと33項目のコンピテンシー）、看護学科は4項目から34項目（3項目のアウトカムと31項目のコンピテンシー）として詳細に設定した。これらは医・看護両学科が協力して策定を進めたものであり、今期において医学部を挙げて一連の教育方針再整備を実施したものとして特筆される。[1.0]

<必須記載項目 2 教育課程方針>

【基本的な記載事項】

- ・ 公表された教育課程方針（別添資料 3903-i2-1）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 「理念」及び「DP」との整合性・体系性が保てるよう、医学科は2018年度、看護学科は2019年度に「教育課程方針」（カリキュラム・ポリシー、以下CPという）を改訂し、その下に医学科は101科目、看護学科は107科目を配した。これらの体系性・達成度は医学部の教育内部質保証体制の充実を目的に2017年度に医学部附属教育支援センター内に設置した「教育IR部門」がモニタしており、その活動を通じて得られた分析に有用なデータの選定やその分析手法（＝内部質保証）は定型化され、2019年度に「アセスメント・ポリシー」として纏め2020年度シラバスにて公表している（別添資料 3903-i2-2）。DP・CPの改訂とIR活動が一体となった教育体系の構築は教育の質向上として特筆される。[2.0]

<必須記載項目3 教育課程の編成, 授業科目の内容>

【基本的な記載事項】

- ・ 体系性が確認できる資料 (別添資料 3903-i3-1)
- ・ 自己点検・評価において体系性や水準に関する検証状況が確認できる資料 (別添資料 3903-i3-2)

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 医・看護両学科で改訂したDPとCPに基づき, 科目間の連携があるカリキュラムを作成し, カリキュラム・ツリー, ナンバリングにより明示した。また, カリキュラムを構成するそれぞれの科目とコンピテンシーの対応及び達成レベル (理解できる, 説明できる, 実施できる, の3段階) はコンピテンシー・マトリックス (カリキュラム・マップ) により明確化した。これらのDP・CPを体系化した資料一式はシラバスへの掲載, 携帯カードの配付等を通して学生に周知を図り, 2019年度1年生対象 (医・看) の調査では, 78.3%の学生がこれらを「学修を進めるうえで有効だった」と回答している。[3.1]
- 医学科ではCPにおける公的な指針「医学教育モデル・コア・カリキュラム (2016年度改訂版)」及び本学独自の教育目標を各科目に過不足なく配分し, 学生の成長に資する適切なカリキュラムへと纏める目的で, 卒業までの全到達目標 (約1,900項目) と全科目の対応を教育支援センターにて一元的にモニタし, 必要に応じて科目間の調整も行っている。その情報は毎年作成するシラバス各科目の「到達目標」への反映や全体集計を用いたカリキュラム・マップ, カリキュラム・ツリー等に纏められ, 学生に周知されている。現在運用するカリキュラムは第2期 (2015年度まで) の入学者, 臨床実習を充実した2016年度以降の入学者, さらにアウトカム基盤型カリキュラムにも対応した2018年度以降の入学者の3種類であるが, このように教育支援センターにより到達目標すべてと各科目の対応, 科目同士の関連性を一覧化し管理することで, カリキュラム変化にも迅速に対応している (別添資料 3903-i3-2) (再掲)。[3.1]
- 看護学科では「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」(2017年), 「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 看護学分野」(2017年), 「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」(2018年), 「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」に準拠したカリキュラムを編成している。その中では上記コア・カリキュラムを参考にした区分 (共通教育科目・専門基礎科目・専門科目) に沿った科目配置, 専門科目における概論・各論・実習の再編と新教育体制の構築, 臨地実習期間の見直し等, 全面的に検討を行い, 看護師・保健師・助産師の教育に対応した新たなカリキュラムを作成し, 改訂カリキュラムは2016年及び2019年に文部科学省より承認されている。[3.1]
- 医学部が独自に設定したアウトカム・コンピテンシーの修得を目的として, 医・看護両学科では学年を超えた垂直統合型科目群として「特色ある科目」を設定している。これはシラバスに掲載しカリキュラム・ツリーでも位置づけを学生に明示している。教育IR部門が2018年度に医学科, 2019年度に看護学科にて行った

調査では、「特色ある科目」に関連するコンピテンシー別 GPA は、医学科の8割以上、看護学科の9割以上がGPA2.0以上であり、高い理解度に達していると確認できる（別添資料 3903-i3-3）。[3.1]

- 地域に貢献できる学生の育成を進める「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」（2015～2019年度、文部科学省）として福井大学全学を挙げて実施する「地域創生の担い手を育み活気あるふくいを創造する5大学連携事業」において、医学科では地域医療の理解と実践、看護学科では地域社会住民の理解や現場で求められる実践的能力の涵養に関わる科目群を設定し、地域医療人の育成を進めた（別添資料 3903-i3-4）。看護学科 2018～2019年度卒業生のうち20名がCOC+「ふくい地域創生士[®]」に認定され、19名（95%）は福井県内の医療・保健施設で医療職に就職し、地域医療に貢献している。また、2018年度認定者のうち1名は「ふくい地域創生アワード」を受賞した。これらの成果は「平成28年度に係る業務の実績に関する評価」において「地域や県内の大学と連携した地域志向教育の拡充」として注目される事項に取り上げられ、2017年と2019年の外部評価では最高評価点4を得、COC+事業の中間評価（文部科学省）において「S」判定を受ける等、高い評価を得た。医学科は2020年度に卒業する6年生から「ふくい地域創生士[®]」の認定対象となり、診療参加型臨床実習では地域病院での実習を増やしたカリキュラム（別添資料 3903-iB-1）等の実施により、地域医療人の育成が進んでいる。[3.2]

<必須記載項目4 授業形態、学習指導法>

【基本的な記載事項】

- ・ 1年間の授業を行う期間が確認できる資料（別添資料 3903-i4-1）
- ・ シラバスの全件、全項目が確認できる資料、学生便覧等関係資料（別添資料 3903-i4-2～3）
- ・ 協定等に基づく留学期間別日本人留学生数（別添資料 3903-i4-4）
- ・ インターンシップの実施状況が確認できる資料（別添資料 3903-i4-5）
- ・ 指標番号5，9～10（データ分析集）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 医学科臨床実習を2016年度医学科入学者から16週増加し、4年生からチューデントドクターとして附属病院で情報収集・診療計画・診療実施・態度について診療参加型での学修を進めている。附属病院では福井メディカルシミュレーションセンターを利用した実習や、2018年度から導入した独自開発のICTシステムCESS（後述）を利用したカルテ記載、医行為の記録等により基礎的診療技能の育成に努め、6年生の卒前臨床医学研修では実践力の修得を目的に地域の教育関連病院においても実習を実施している。海外での実践力修得も促すため、2018年度より4～5年生全員に海外の学術協定締結大学や留学実績等を周知し、2019年度には例年の1～3名から大幅増の9名が海外での実習を選択した（別添資料 3903-i4-6）。また1～2年生からは早期体験実習として「外来患者対応（エスコ

福井大学医学部 教育活動の状況

ト) 実習」「看護体験実習」「多職種連携教育科目」導入等(別添資料 3903-i4-8)によって知識と技能を関連付けながら臨床実習へと繋げている。一連の教育は2019年度6年生の臨床実習後 OSCE (以下 Post-CC-OSCE という) で受験者全員が合格し、うち6割以上が「良い(学生としては良くできている)」との評価(別添資料 3903-iB-1) (再掲)を得ていることから成果として確認できる。[4.1]

- 診療参加型臨床実習を実質化し学生のアウトカム評価を行うための ICT システムとして「臨床教育支援システム CESS (Clinical Education Supporting System)」を本学独自に開発し(別添資料 3903-i4-7), 2017年度5年生から附属病院 20 診療科のうち3診療科でテスト運用し, 2018年度には12診療科(60%), 2019年度は19診療科(95%)で導入した。CESSは附属病院の電子カルテと連動し, 患者情報に合わせてリアルタイムに更新することで診療情報を学生と共有する仕組みであり, 学生は担当患者の診療を学生用カルテに記載することができ, 2019年度の5年生各学生は1年間で平均33.6名の患者を担当し151.7回の学生カルテ記載を行っている。また, CESS内に設けられたチャット機能により質問や振り返り等のコミュニケーションが可能であり, これによる教員のフィードバックも各学生に47.6回/年行われている。これらはシステム内でポートフォリオとして記録維持され, 学生はカルテ, 経験医行為, 経験疾患と担当診療科の評価によって自らの実習を振り返ることができる。教員はポートフォリオの閲覧と入院患者のデータとのリンクから各学生の経験不足の患者・疾患の割り振りを行うことができ, 各学生が取組んだ一連の実習成果について各診療科の実習終了時に CESS 内で評価を実施している。このシステムを利用した2019年度卒業生は, 10診療科では9割の学生が評価点平均70点以上と高い学修成果を上げており, 学生の8割がCESSを利用して「カルテ等の文書作成能力が向上した」, 「診療に参加している実感が持て, 学修意欲が増した」と評価している。

本システムの参加型臨床実習の実質化における有用性や, 実習ポートフォリオ作成による学生の学修PDCAサイクルの実現は, 「文部科学省主催医学教育指導者のためのワークショップ」(2017年)において参加大学77大学中1位の取組として選出され, 「平成29年度に係る業務の実績に関する評価結果」において「医学教育の国際標準化への新システム開発」として注目される事項として取り上げられた。2019年度の国際アドバイザーTakayama 博士による教育評価においても『医学部については, 2016年の教育評価では問題が1つあった。カルテの記入業務に関して, 臨床現場と教育現場との間でうまくつながっていない制度上の問題があったが, この問題を解決するために素晴らしい臨床教育支援システム(CESS)を開発し・・・』と非常に高い評価を受けている(別添資料 3903-iC-5)。以上の臨床実習システムの構築と利用は医学教育質向上において特筆できるものである。

[4.1]

- 多職種連携教育推進のため, 医学科は2018年度, 看護学科は2019年度のアウトカム基盤型教育の導入から, 1年生からの段階的な早期実習体験(アクティブ・ラーニング)によって徐々に達成レベルを高め, 高学年の臨床・臨床地実習によって完成させるカリキュラムを作成し, それぞれ医学科コンピテンシー(3)多職

種連携実践，看護学科コンピテンシー（7）多職種連携に纏めた（別添資料 3903-i4-8）（再掲）。学修成績調査では，医コンピテンシー（3）は100%が「GPA3.00以上」（別添資料 3903-i6-4），看コンピテンシー（7）は90.2%が「GPA2.00以上」（別添資料 3903-i3-3）（再掲）である。また，これと並行して，医学科2年生「地域医療学」，看護学科2年生「公衆衛生看護学概論」の中では地域住民の健康課題の解決を学ぶため，医学科学生と看護学科学生が合同で診療所等での地域ケア実習を行う医看合同授業も取り入れ，実施後の「地域住民の健康課題の解決に医師・看護職等の連携が重要であると思うか」の問いに対し，学生の95.7%が「大変そう思う，そう思う」と肯定的回答をしている。これらはカリキュラム，授業形態，学修指導法の工夫によって医師・看護師連携を含めた多職種連携についての理解が進んでいることの証左である。[4.1]

- 様々な教育方法の組合せによる教育を実施し，中でもアクティブ・ラーニング（以下ALという）を第3期の全学的取組として推進し，医学部はAL導入率を開講授業の86.7%（2015年度）から97.5%（2019年度）に増加させた。ALの手法と導入の程度（各授業内でALがどの程度実施されるか）はシラバスにより学生に明示している。AL導入を進めるにあたり授業評価アンケートの分析を行い，医学科は低学年においてAL授業コマ数が多くなるよう管理し，手法については低学年から高学年になるにつれて「知識・技能」（実験，ミニテスト等），「思考力・判断力・表現力」（ディベート，プレゼンテーション等），「主体性・協働」（実習，現地調査等）とより高次の能力を伸ばすALが増えるよう質・量を調整し，学修効果の向上を図っている。これらによって，全学年の自学自修時間は13.1時間/週（2015年度）から17.8時間/週（2019年度）と1.4倍に増加し，中でも1～2年生は1.9倍の増加が見られ，自ら学ぶ姿勢の涵養が示されている（別添資料 3903-i4-9）。[4.1]
- 学内ICT環境の整備に努め，特に学修管理システム（LMS）であるWebClassを全学的に導入し履修登録から講義・実習資料閲覧やレポート提出等をネットワーク上で可能とした。WebClassは導入当初2016年の2科目から2019年には40科目と増加している。2018年度の授業評価アンケートから，WebClassを積極的に講義・実習で利用する33科目において学生は「授業内容に関して十分な時間外学修をした」と評価しており，自学自修時間の増加（別添資料 3903-i4-9）（再掲）にも寄与している。

また，本学が従前より進めてきた画像医学教育に関して，医学部附属先進イメージング教育研究センターの独自開発によるICT教育システム「ideata2」を用いた教育の充実が今期においても図られ，組織病理学標本136症例（71症例の増加），放射線科及び放射線部9,324症例（1,998症例の増加），産婦人科51症例（11症例の増加）の教育コンテンツが蓄積利用されている。特に2017年度より2年生で開始された「画像解剖総合演習」では，コンテンツ症例を用いてシステム上で人体構造を学ぶ演習を行っている。画像医学教育の推進を続けた結果，6年生への「画像医学教育システムで学修を深めることができたか」（カリキュラム評価アンケート）の問いに対し，「強くそう思う，そう思う」とした学生は2014～2015

福井大学医学部 教育活動の状況

年度の61.3%から2016～2019年度は75.2%に増加し、学生は本学独自のICTシステムにより学修を深めていることが確認できる。[4.3]

<必須記載項目5 履修指導, 支援>

【基本的な記載事項】

- ・ 履修指導の実施状況が確認できる資料 (別添資料 3903-i5-1)
- ・ 学習相談の実施状況が確認できる資料 (別添資料 3903-i5-2)
- ・ 社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培う取組が確認できる資料 (別添資料 3903-i5-3)
- ・ 履修上特別な支援を要する学生等に対する学習支援の状況が確認できる資料 (別添資料 3903-i5-4)

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 「第3期修学環境支援基本方針」(学生の就学環境整備に係る第3期中期目標・中期計画により2016年度全学策定)に沿い入学時から卒業に至るまで、①積極的な学修活動を支える修学環境、②入り口から出口までのきめ細かくかつ組織的学修支援、③自主学修を支える充実したラーニングコモンズ、の点から整備充実を行った。能動的な学修のためにWebClassやCESSのLMS整備、PC70台を備え24時間利用可能な「スキルラボ」2部屋の新設(2017年度)、医学図書館では英語論文作成支援コーナー設置(2018年度)やUSMLE講座開講の他にWi-Fiアンテナやグループ学修用モニタを増設し自修環境の整備を行い、学生等からの要望に配慮した学修環境として講義室や図書館をすべてLED照明化し学内PCやインターネット環境の改善及び臨床実習学生の居室整備を進めた(別添資料3903-i5-8)。学生の学修支援としての新入生オリエンテーションやガイダンス、新入生研修、大学入門・医学入門等による入学者支援の実施について内容等の充実を行った。これらに対し「知識や技術の修得に対し、本学の教育環境は適切だった」と回答した学生(最終学年)は第2期の75.7%から第3期では82.0%に増加し、修学環境支援が充実したことの証左であるとともに中期計画(I-1-1-3)として掲げた自学自修時間の増加や成績の向上に繋がった。[5.1]
- 2018年度以降は、医学科留年生の保護者を対象に「保護者懇談会」を実施し、e-ポートフォリオを使った個別面談による学生の状況説明、教育支援センター分析による学年成績とCBTや国家試験成績の関連等についての全体的説明を行い、大学と保護者が連携して支援を行う体制を構築した。懇談会後のアンケートでは保護者全員が自身の子供(学生)の現状理解が深まったと回答している(別添資料3903-i5-5)。[5.1]
- 2017年度には、履修上特別な支援を要する学生に対する合理的配慮申請の手続体制を整備し、保健センター・学生総合相談室カウンセラーの勧めで3名が申請し、うち2名が承認を受け合理的配慮を受けながら修学している。また、第3期は2期と比べて保健センター・学生総合相談室における相談件数が1.3倍増加しており、その内訳として修学関連の相談が約2倍となっている(別添資料3903-

i5-6)。このため、e-ポートフォリオによる支援、保護者懇談会、入学前の保護者説明会等を含め、学生支援委員会を中心として専任カウンセラーと医学部教員の協働により企画・実施を行っている。アンケート調査（2019年）によると医学科・看護学科ともに学生相談や心の健康対策について「十分～やや満足」とする学生は9割以上であり学生支援が必要な学生になされている。[5.1]

- 医学部独自に運用する「医学部学生統合データベース（別添資料 3903-iC-4）」の内容について検討・整備を進め2019年度にこれを活用した全学生の「e-ポートフォリオ」を新たに構築した（別添資料 3903-i5-7）。e-ポートフォリオは1～4年生時の各科目の点数表示による成績、コンピテンシーに相当する科目のGPA（レーダーチャート化）、各学年やCBTにおける成績順位等の客観的評価に加え、主観的評価情報としてコンピテンシー達成度の自己評価（レーダーチャート化）を一括して表示したデータであり、各学生に明示し自己を振り返ることができることとし、更にアドバイザー教員、保護者と共有することで履修指導にも役立っている。e-ポートフォリオは国際アドバイザーTakayama博士による教育評価（別添資料 3903-iC-5）（再掲）において『学生の自己成長能力の発達について教員がフィードバックを提供し続けることができる、世界クラスのe-ポートフォリオプラットフォームを作り上げた。（中略）学生個人の成長の度合いを、このように視覚化することは、学生と教員双方が、学生の自己成長と、医学的理解と専門知識の発達との関係を観察するための強力なフレームワークとなっている。』と高い評価を得、学修成果の可視化と指導において特筆するものである。[5.2]

<必須記載項目6 成績評価>

【基本的な記載事項】

- ・ 成績評価基準（別添資料 3903-i6-1）
- ・ 成績評価の分布表（別添資料 3903-i6-2）
- ・ 学生からの成績評価に関する申立ての手続きや学生への周知等が明示されている資料（別添資料 3903-i6-3）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 医学科では2018年度入学者から学修成果としての「アウトカム評価」を目的に、その修得度を確認する「コンピテンシー達成度（コンピテンシー・マイルストーン）」を設定し、アウトカム及びコンピテンシー区分で集計した単位修得状況（GPAによる）も確認することとした。学生は各学年終了時にコンピテンシー進捗状況を各自振り返り、科目等の成績（客観的評価）と自己評価（主観的評価）を比較した形でアウトカム・コンピテンシー区分集計され、e-ポートフォリオとして全学生は通知されている。2018年度1年生では、アウトカム3項目に対し8割以上の学生のGPAが「2.00以上（目標を概ね達成）」であり、自己評価も「理解できる、ある程度理解できる」と肯定的に回答した者が約9割以上となり、新たに導入したアウトカム基盤型教育における教育成果の可視化がなされ、順調に達成されていることが確認できる（別添資料 3903-i6-4）（再掲）。[6.1]

福井大学医学部 教育活動の状況

- 2017 年度に 4 年生の CBT 成績と 2 年後の卒業時学科試験成績の分析を教育 IR 部門が行い相関を認め、アウトカム達成のため進級判定の厳格化を進め、2017 年度から CBT の合格基準を「IRT 標準スコア 369」から「420」へと引き上げ、全国の上位 85%に位置する学生のみが臨床実習に進む改革を行った。それ以降、CBT 成績は全国平均を大きく上回る結果(平均正答率 82%程度)を得ているとともに、この基準が適用され 2019 年度に卒業した学生は医師国家試験合格率が 100%に達し、成績評価の厳格化により教育の質保証がなされた点は特筆できる(別添資料 3903-i6-5)。[6.1]
- 学修成果の主要な客観的評価は各科目成績(単位)であり、医学科・看護学科ともに「福井大学における多面的かつ厳格な成績評価のガイドライン」に従った厳格な評価を行っている。各科目評価は試験を含めた総合評価とし、評価方法をシラバスにすべての科目が明記し、学年ごとの進級評価においても基準を明確化し公表しており、最終的には GPA による客観評価としている。この GPA の信頼性は、各学年間の GPA 相関や各科目の GPA 分布比較によりチェックしており、更に客観性・妥当性を検証するため学外試験(共用試験 CBT, 医師国家試験模試, 看護師国家試験模試等)との相関も確認している(別添資料 3903-i6-2(再掲), 3903-i6-6)。これらの分析は教育 IR 部門が行い、IR 部門報告書に纏め教育支援センターHPに掲載することで広く周知しており、厳格な成績評価に基づく教育の質保証を実施している点は特筆できる。[6.2]

<必須記載項目 7 卒業判定>

【基本的な記載事項】

- ・ 卒業の要件を定めた規定(別添資料 3903-i7-1)
- ・ 卒業判定に関する教授会等の審議及び学長など組織的な関わり方を含めて卒業判定の手順が確認できる資料(別添資料 3903-i7-2)

【第 3 期中期目標期間に係る特記事項】

- 医学科の卒業判定の体制は、卒業時学科試験について試験委員会、各科目試験や臨床実習について医学科合否判定懇談会等での総合的審議を経て、最終審議と判定を教授会において行うこととしている。特に 2019 年度から卒業時学科試験に 2 回の医師国家試験全国統一模擬試験(MEC)を組合せ、本学独自問題の第 1 試験と合わせた 3 回を実施した。試験期間の長期化もあり 6 年生の自学自修時間は前年度比 1.2 倍となり、特に成績下位層(GPA 学年 90 位以下)では国試サポート教員の指導もあり学修時間が 1.3 倍(前年度比)に増えた。これによって成績下位層の医師国家試験不合格率が 2016~2018 年度の平均 22.7%から 0%へと改善され、2019 年度卒業学生の国試合格率 100%達成となっている(別添資料 3903-i7-4)。また、卒業判定の質の面では、各科目等で作成する本学独自卒業試験問題の原案を 2019 年度から試験委員会が一元的に管理し、内容・難易度のチェックやブラッシュアップにより精度を高めたことで、外部模擬試験との相関が高まったことも確認できている。卒業時学科試験アンケート「学修のまとめとして学力

把握に役立つものであったか」の調査結果も 55.1% (2017 年) から 89.1% (2019 年) に上昇した (別添資料 3903-iiA-2)。これら一連の改善成果は本学の卒業判定の妥当性が向上したことの証左である (別添資料 3903-i7-3)。[7.1]

- 看護学科の卒業判定は、看護学科合否判定懇談会にて臨地実習や卒業研究を含めた必要要件単位 126 単位の修得について、また保健師・助産師志望学生は対応する単位を更に加えて審議し、医学部教育委員会と教授会において最終審議を経て判定している。卒業に向けた取得単位が不足する学生には担当科目教員による面談や学年主任、保護者を含めた面談等を行う支援を積極的に実施している。これらにより第 3 期における 看護学科卒業生の 99% が卒業時に看護師・保健師・助産師国家試験に合格していることから、一連の卒業判定の妥当性の証左である (別添資料 3903-i7-5)。[7.1]

<必須記載項目 8 学生の受入>

【基本的な記載事項】

- ・ 学生受入方針が確認できる資料 (別添資料 3903-i8-1)
- ・ 「毎年度の入学者選抜確定志願状況」 (文部科学省公表)
- ・ 入学定員充足率 (別添資料 3903-i8-2)
- ・ 指標番号 1～3, 6～7 (データ分析集)

【第 3 期中期目標期間に係る特記事項】

- 多様な学生の募集に努めるため入試情報を積極的に公開するとともに、入試制度の変更やアドミッション・ポリシー (以下 AP という) の改定を医学科は 2018 年度、看護学科は 2017 年度に行った。広報の視点から入試説明、教育内容説明を行う医学部オープンキャンパスへの参加者は第 2 期の 399.5 名/年から 第 3 期平均は 489.5 名/年と約 20%増加した。特に 2018 年度からミスマッチによる入学後の休退学を防ぐ目的で、オープンキャンパスに保護者対象企画として入学後に学生が抱える課題について保健管理センター・学生総合相談室カウンセラーによる説明を実施し、これらにより保護者の参加者は第 2 期の 98.8 名/年から 第 3 期平均は 202.3 名/年と倍増している。さらに高大連携の取組として、JST グローバルサイエンスキャンパス『生命医科学フューチャーグローバルサイエンティスト育成プログラムー“Fukui Medical High School”としての Role Model 創成ー』(2015～2018 年)を医学部中心に実施し、269 名の高校生が生命医科学の講義実習に参加し、本学へ入学する学生も見られる (2019 年度までに医学部に 19 名)。これらの広報・高大接続等の取組の結果、第 3 期 (2016～2020 年度入学者選抜) 平均の 志願状況は医学科で 6.9 倍、看護学科で 3.3 倍であり、また入学定員充足率も良好である。[8.1]
- 医学科は「求める学生像」AP⑤「地域医療に貢献する」(コンピテンシー (8) 福井医療力を達成できる) による入学者を確保する目的と、県内医師不足による福井県からの要請もあり、2018 年度に入試委員会で過年度までの卒業生の出身地と GPA、卒後の就職地等について分析を行い、福井県内出身者は入学後の成績が

福井大学医学部 教育活動の状況

県外出身者より良好で、かつ県内就職率が高い結果を得たことから、2020年度推薦入試より県内出身者のみが出願できる「地域枠」定員の増加（5→10名程度）、出身地の指定のない「全国枠」定員を削減（15→10名程度）することを決めた。2020年度推薦入試の「地域枠」を第1希望とする志願者数は16名で、前年比1.5倍に増加し、推薦入試「福井健康推進枠10名」とともに地域医療に貢献する人材育成に向けた取組が進められている（別添資料3903-i8-3）。[8.2]

- 看護学科はアウトカム基盤型教育の導入に伴い、重要で関連科目数の多いコンピテンシー（4）、（5）の目的とする「看護実践力」を達成できる入学者を選抜する目的で、2018年度に入試区分別（一般・推薦）の成績と休退学実績等の入学者分析を入試委員会で行った。推薦入学者は在学期間を通じた成績が一般入試入学者と同等であり、更に看護実践力のコンピテンシー・マイルストーンとなる臨地実習時の成績は上回ること、かつ休退学率も低いとする分析結果を基に、2020年度入試から推薦定員を増加（20→25名）、一般後期定員を5名削減（10→5名）した。これに伴い、2020年度推薦入試の福井県内出身志願者数は53名で、前年比1.2倍に増加した（別添資料3903-i8-4）。アウトカムに基づく教育改革推進と学生の受入に対するデータに基づく医・看護両学科での一連の改革は、地域医療人育成において特筆できる。[8.2]

<選択記載項目B 地域・附属病院との連携による教育活動>

【基本的な記載事項】

（特になし）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 医学科においては、診療参加型臨床実習を附属病院は基礎力、地域病院は社会ニーズを踏まえた実践力を重視とする方針の下、2016年度入学者から地域病院での実習期間を4倍（5→20週間）、総実習期間を1.3倍（計48→64週間）に増加した。そのため、実習開始を半年早めるカリキュラムを作成し、2019年度（2016年度入学者）以降、4年生後期から附属病院での臨床実習をスタートしている。更にアウトカム基盤型教育を導入した2018年度入学者からは、「特色あるカリキュラム」に「地域医療」を設定し、低～中学年科目の「地域医療テュートリアル」、「地域医療学」、「社会と医学・医療I・II」等との連携を強化し、在学中を通じた実践力の育成を図っており、これらの取組はコンピテンシー（7）、（8）に纏めている。能力育成状況に関して教育IR部門が行った2018年度調査では、コンピテンシー（7）、（8）の成績は94.6%以上の学生が「GPA2.00以上」と良好である（別添資料3903-i3-3）（再掲）。

また、県内及び隣接県の36実習病院等との連携強化のため、2018年度から地域病院の院長、実習責任者等が集まる「卒前臨床医学研修にかかる説明会」を新たに開催した。説明会では、本学の教育方針に基づく実習方針や期間変更等の説明に加え、参加者が4グループに分かれ地域病院において経験させる医行為やその評価方法等について意見交換を行い、実習の改善や標準化を行っている。これ

らにより、学生による 2016～2019 年度の実習施設に対する評価は、附属病院・地域病院ともにすべての項目で 8 割以上が肯定的である。さらに CESS を使った診療科による学生評価 (2019 年度卒業生) では全員が GP 2 以上の評価、同じく 2019 年度からトライアル実施を行った Post-CC-OSCE でも全員が合格ライン以上であり、かつ 6 割以上が「良い (学生としては良くできている)」と判定されており、附属病院及び地域医療機関での高い教育成果を示している (別添資料 3903-iB-1) (再掲)。[B. 1]

- 看護学科の臨地実習は、4 年間を通したプログラムとして実施され、臨地実習の必修 12 科目のうち、1 年生「日常生活ケア実習」、2 年生「看護展開実習」、及び 3 年生「成熟期看護学実習 I・II」の 4 科目は附属病院看護師等 (非常勤講師) が基礎力を中心に育成し、他の 8 科目 (別添資料 3903-i4-8) (再掲) は附属病院と地域の 39 施設が協力して進めることで実践力の育成に努めている。臨地実習に対する情報共有を学内非常勤講師とは例年 50 名程度が参加する「臨地実習打合せ会議」において、地域の学外指導者とは実習担当教員との個別懇談において行っている。実習全体の振り返りを行う「看護技術実習 (2019 年度よりマネジメント看護学実習)」は附属病院のみで実施していたが、2017 年度から企業の健康管理センター、地域包括支援センター、就労移行支援事業所、地域活動支援センター等の学外施設でも行い、多様な実践の場で実践力が確認・完成できるようにする等、実習の内容は随時改善しており、学生による臨地実習評価も約 9 割が肯定的評価をしている。これら地域との協力による継続的な実習改善により、実習後に行う「臨地実習における看護基本技術の卒業前到達度調査 (学生の自己評価)」では、2015 年度と比較してすべての区分で到達レベルが向上し、実習の質及び成果の向上を示している (別添資料 3903-iB-2)。[B. 1]

<選択記載項目 C 教育の質の保証・向上>

【基本的な記載事項】

(特になし)

【第 3 期中期目標期間に係る特記事項】

- 「福井大学のファカルティ・ディベロップメントの基本方針 (第 3 期)」 (2017 年度全学策定) に従い教員の教育活動に対する理解増進・能力開発のため、教育支援センターが中心となり、また全学の高等教育推進センターと協調して計画的に FD を企画・実施している (別添資料 3903-iC-1)。FD 内容は、医学及び看護学教育分野別評価、AL、国家試験、学生相談、入試等であり、その回数 (第 2 期 6 回/年、第 3 期 9 回/年) 及び参加者数 (第 2 期 202.0 名/年、第 3 期 434.5 名/年) とも第 2 期を上回っている。テーマとして第 3 期はアウトカム基盤型教育導入に伴う「教育課程方針、編成」に関するものが回数、参加者数ともに過半を占め、ここで実施された教授・教員参加による講演会やワークショップを通して、学位授与方針から教育課程方針、それらの体系整備 (別添資料 3903-i1-1～4、別添資料 3903-i2-1、別添資料 3903-i3-1、別添資料 3903-i3-3) (再掲) が進んだ。FD

福井大学医学部 教育活動の状況

参加者のアンケート評価では、9割超の教員が「講演内容は理解できた～やや理解できた」と回答し有用性も示されている。これらの活動資金は全学競争的資金「教育改善のための重点配分経費」（プロジェクト名称「大学教育改革に必要な教員の教育意識向上のためのFD・ワークショップ活動の促進」及び「教育 IR データを用いた教育評価・改善のための PDCA に基づく内部質保証体制の整備」）として得られたもので、これにより教育 IR 活動が進み、その成果を FD に活用し、医学部一丸となり教育改善を進めたことは特筆できる。[C.1]

- 各科目の改善のため、「授業評価アンケート」をすべての必修科目で実施している。2018年度から集計結果に教育支援センターが学生統合データベースを使い学生の成績区分別情報や過年度のアンケート評価を組合せて詳細に分析し、その結果を各教員にフィードバックしている（別添資料 3903-iC-2）。これにより授業改善が進み、教員の学修指導方法に関連する問3～9（授業内容の興味、理解、明瞭さ等）は、改善前の2017年度と比べ、すべての項目で評価を上げている。また、GPAも改善前の2017年度と2019年度を比較すると両学科ともに上昇し、以上は本学における教員の教育力向上の証左である。[C.1]
- 教育マネジメント PDCA 体制のうち、点検・評価組織の整備を進め、2017年度に医学部附属教育支援センター内に教育 IR 部門を設置し、月2回程度開催する「センター定例ミーティング」と合わせて随時点検を行う体制とし、2018年度には教育関連病院、医学・看護学教育専門家等の学外委員を含めたプログラム評価委員会を設置することで教育 IR データに基づく点検・評価機能（Check）を実質化した。これらの過程で抽出された問題点は、カリキュラム委員会、入試委員会等の各専門委員会で改善案を検討し（Action）、医学部教育委員会、医学部教授会での審議を経て計画（Plan）・実施（Do）に移している（別添資料 3903-iC-3）。また、2018年度より学生の教育施策への参画（カリキュラム委員会の委員として参加）により計画段階から関与できる体制としている。[C.2]
- 教育 IR 部門では、医学・看護学の教育成果のチェックに用いるデータを経年的に収集・一元管理する「医学部学生統合データベース」を構築しており、それらを纏め、現状の点検・評価に活用する「IR 部門報告書」を2018年度以降に作成している（別添資料 3903-iC-4）（再掲）。これは教育支援センターのHPに掲載公表しており、各種教育改善の基礎データ（別添資料 3903-iC-3）（再掲）として利用されている。2019年度にはこのPDCAサイクルで得られた分析データの選定、その利用法等のノウハウをアセスメント・ポリシーの策定（別添資料 3903-i2-2）（再掲）にも反映させ、医学部と協働して医学教育の質向上を担っている。[C.2]
- 医学部教育活動の総合的評価として、外部評価の実施に取組み、第3期開始時の医学部自己点検評価に基づく外部評価（2016年）で明らかとなった優れた点と課題に基づき教育改革を進めた。その後、看護学科ベンチマーキング（2017年）、国際アドバイザーTakayama 博士による教育評価（2019年）を実施し、その結果として教育プログラムや教育水準、学生支援体制等について高い評価を得ている。このうち Notter 教授による看護学科ベンチマーキングでは『WHO の出しているゴールドスタンダードに基づいて教育・・・このゴールドスタンダードの内容が

福井大学医学部 教育活動の状況

かなり含まれていた。・・・学生は非常にモダンな素晴らしい病院と教育システムに囲まれ・・・』と看護学教育が国際的レベルにあると評価され、Takayama 博士による医学部教育評価では『IR のデータ情報に基づく評価と改善の PDCA サイクルは・・・非常に効果的な枠組である。e-ポートフォリオの開発と実行は高く称賛できる。臨床教育支援システム (CESS) は・・・優れた包括的なダッシュボードであり・・・』等、第3期における取組に高い評価が得られた。総じて本学教育に対する評価は高く、教育の質が高く保証されていることの証左となっている (別添資料 3903-iC-5) (再掲)。[C.2]

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

<必須記載項目1 卒業率、資格取得等>

【基本的な記載事項】

- ・ 標準修業年限内卒業率（別添資料 3903-ii1-1）
- ・ 「標準修業年限×1.5」年内卒業率（別添資料 3903-ii1-2）
- ・ 指標番号 14～20（データ分析集）
- ・ 医学課程卒業者の医師国家試験合格率（厚生労働省公表）
- ・ 看護学課程卒業者の看護師国家試験合格率（厚生労働省公表）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 教育の国際通用性を確保する取組を全学で進め「福井大学における多面的かつ厳格な成績評価のガイドライン」を策定し、各科目は医学部 DP に基づいた医学教育モデル・コア・カリキュラムの学修目標と本学独自目標によって構成する到達目標を設定したうえで、その多面的評価方法や評価割合をシラバスに示している。厳格な成績評価基準や進級・卒業判定を実施し、修業年限内で修了する学生は医学科で8割以上、看護学科で9割以上であり、退学者を除くとほぼ全員が「標準修業年限×1.5」年内に卒業している。卒業生の成績をGPAにより分析すると、両学科ともに全員が「1.00」以上であり、第2期より医学科は「2.00以上」が増加、看護学科は「2.00以上が」9割以上と高い成績を維持しており、学生は各科目において相応な学力や資質・能力を身につけていることが確認できる（別添資料 3903-ii1-3）。[1.1]
- 第3期の医師国家試験の合格率（新卒）は92.2%で全国平均合格率を上回り、特に成績評価の厳格化（別添資料 3903-i6-5）（再掲）、卒業試験の標準化（別添資料 3903-i7-3）（再掲）を経た最初の卒業生である2019年度は100%に至っており、過半の学生が卒業時点で相応の学力や資質・能力を身につけたことの証左である（別添資料 3903-i7-4）（再掲）。[1.2]
- 第3期において看護師国家試験の合格率（新卒）は99.1%であり、常に全国平均合格率を上回ったことは、卒業時点で学生が相応な学力や資質・能力を身につけたことの証左である。保健師国家試験及び助産師国家試験では4年間（2016～2019年度）合格率100%であることは特筆できる。これらの成果は、2年生で2回、3年生で2回、4年生では看護師向けに5回程度、更に保健師及び助産師向けにそれぞれ3回の模擬試験を実施し、学年主任教員及び卒業研究担当教員による模試の成績把握と国試サポートを目的とした面談や学修指導、2018年度からは2年生時点で教員手作りの模試実施による早期からの学修指導、学生国家試験対策委員による計画的な模試実施（2018年度からは「看護学科模試委員連絡会」を教員及び1～4年生の委員により組織し情報交換や模試実施計画の作成を行っている）等、学科を挙げての対応によるものであり特筆される（別添資料 3903-i7-5）（再掲）。[1.2]

＜必須記載項目 2 就職, 進学＞

【基本的な記載事項】

- ・ 指標番号 21～24 (データ分析集)

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 第3期では、医師国家試験合格者全員が医療機関等に就職し、うち37.6%が福井県内の医療機関に就職し、県内就職率は第2期の35.0%より増加している(別添資料 3903-ii2-1)。県内就職者の増加の要因は地域枠関連入試(地域枠5名、福井健康推進枠10名)を経た卒業生の増加にあり、2019年度実施入試(2020年度入学)から福井県との連携により、福井健康推進枠の定員10名を確保したうえで地域枠の定員を2倍(5→10名)に増員したことで、県内医師確保政策へのさらなる貢献をしている(別添資料 3903-i8-3)(再掲)。また「地域医療推進講座」(福井県寄附講座)による「福井県学生地域夏期研修」(年10数名参加)、「福井県医師確保修学資金奨学生交流会(春・秋)」(各50名程度参加)を実施し、地域枠関連入試学生の教育に努めている。これらの入試を経た入学者を含めた全学生にコンピテンシー(8)福井医療力を中心とした特色ある教育を行い、その結果として地域医療に携わる医療人を育成していることは特筆でき、本学中期目標で掲げた「優れた高度専門職業人の育成」がなされている。[2.1]
- 第3期では、看護師・保健師・助産師国家試験合格者のほぼ全員が医療人として医療機関等に就職しており、うち67.6%が福井県内の医療機関に就職し、県内就職率は第2期の65.4%より増加している。その要因は、福井県内出身者の県内就職率は第2～3期を通じて概ね8割の高い水準を維持する一方、COC+等の地域医療プログラム(別添資料 3903-i3-4)(再掲)を学生全員が履修することによって福井県外から入学した学生が卒後も県内に留まる割合が38.2%となり、第2期の33.1%より増加したことが挙げられる。(別添資料 3903-ii2-1)(再掲)。以上の地域社会からの医療人育成に対する期待に応えた成果は特筆でき、第3期中期目標で掲げた「優れた高度専門職業人の育成」がなされている。[2.1]
- 大学院医学系研究科への進学を促す目的で、医学科学生が博士課程科目を早期履修できる博士課程科目早期履修コースが本学のATM(Advanced Training of Medico-research)プログラム中にある。2016年度は新規履修がなかったため2017年度から対象を3年生まで拡大し説明会を開催することにより2017年度4人、2018年度5人、2019年度8人と履修者が増加し、学部在学中より大学院講義に参加する医学科学生が増加している。[2.1]

＜選択記載項目 A 卒業時の学生からの意見聴取＞

【基本的な記載事項】

- ・ 学生からの意見聴取の概要及びその結果が確認できる資料
(別添資料 3903-iiA-1)

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 医学科6年生及び看護学科4年生への意見聴取としてカリキュラムアンケートを継続して行い、ほぼすべての学生の意見聴取ができています。これは本学の教育目標の達成状況及びカリキュラムの全体的構成を問う継続的な設問に、教育改善の基礎資料とする設問を加え実施している。継続設問では、「本学カリキュラムの履修によって臨床能力を修得できると思いますか」に対し、「強くそう思う・そう思う」とする学生が第2期の64.2%から第3期は78.5%と増加、「臨地実習等により基礎的な技術・知識を身につけることができましたか」に対し、「強くそう思う・そう思う」とする学生が第2期の80.2%から第3期は90.6%と増加する等、医学科のすべて、看護学科のほぼすべての設問で肯定的評価が第2期を上回っており、本学の教育が学生にとり相応な学力や資質・能力を身につけ学業の成果を得られることに概ね満足していることの証左である（別添資料3903-iiA-1）（再掲）。[A.1]
- 医学科卒業時学科試験（統一試験）について、2017年度実施の「学修のまとめとして学力把握に役立つものであったか」との問いへの肯定的評価は55.1%にとどまり、特に成績上位層が低い評価をしていた。この結果より卒業時学科試験の改善を進め、本学の教育目標の達成のみならず、医師国家試験にも活用できるよう試験問題の標準化を図った（別添資料3903-i7-3）（再掲）。これにより、2019年度の卒業時学科試験アンケート評価は89.1%が肯定的評価となり、他項目についても肯定的評価が80%以上に至った。学生からの意見聴取を継続的に実施し、国家試験成績の向上等、教育改善に繋がっていることは特筆できる（別添資料3903-iiA-2）（再掲）。[A.1]

<選択記載項目B 卒業生からの意見聴取>

【基本的な記載事項】

- ・ 卒業後、一定年限を経過した卒業生についての意見聴取の概要及びその結果が確認できる資料（別添資料3903-iiB-1）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 医学科は第1期から、看護学科は第2期から卒業後4～6年を経た卒業生にアンケート調査を行い、卒業時学生アンケートと同じく、本学の教育目標の達成状況及びカリキュラム構成等について継続的に意見聴取を実施している。医学科卒業生からは医学知識、臨床能力、積極性、学修内容の消化度等について第2期より肯定的回答が多く、看護学科卒業生からは必要な知識、献身的な態度、協調性、医療倫理観、学修内容の消化度、学修時間、カリキュラム全体の構成等について第2期より肯定的回答が多い。このように第3期において、医学科、看護学科ともに肯定的評価が増加、若しくは高い評価が維持されていることから、両学科の教育目標の達成、学生の期待に応えた教育が進められていることの証左である（別添資料3903-iiB-1）（再掲）。[B.1]

【参考】データ分析集 指標一覧

区分	指標 番号	データ・指標	指標の計算式
1. 学生入学・在籍 状況データ	1	女性学生の割合	女性学生数／学生数
	2	社会人学生の割合	社会人学生数／学生数
	3	留学生の割合	留学生数／学生数
	4	正規課程学生に対する 科目等履修生等の比率	科目等履修生等数／学生数
	5	海外派遣率	海外派遣学生数／学生数
	6	受験者倍率	受験者数／募集人員
	7	入学定員充足率	入学者数／入学定員
	8	学部生に対する大学院生の比率	大学院生総数／学部学生総数
2. 教職員データ	9	専任教員あたりの学生数	学生数／専任教員数
	10	専任教員に占める女性専任教員の割合	女性専任教員数／専任教員数
	11	本務教員あたりの研究員数	研究員数／本務教員数
	12	本務教員総数あたり職員総数	職員総数／本務教員総数
	13	本務教員総数あたり職員総数 (常勤、常勤以外別)	職員総数(常勤)／本務教員総数 職員総数(常勤以外)／本務教員総数
3. 進級・卒業 データ	14	留年率	留年者数／学生数
	15	退学率	退学者・除籍者数／学生数
	16	休学率	休学者数／学生数
	17	卒業・修了者のうち標準修業年限内卒業・修了率	標準修業年限内での卒業・修了者数／卒業・修了者数
	18	卒業・修了者のうち標準修業年限×1.5年以内での卒業・修了率	標準修業年限×1.5年以内での卒業・修了者数／卒業・修了者数
	19	受験者数に対する資格取得率	合格者数／受験者数
	20	卒業・修了者数に対する資格取得率	合格者数／卒業・修了者数
	21	進学率	進学者数／卒業・修了者数
	22	卒業・修了者に占める就職者の割合	就職者数／卒業・修了者数
4. 卒業後の進路 データ	23	職業別就職率	職業区分別就職者数／就職者数合計
	24	産業別就職率	産業区分別就職者数／就職者数合計

※ 部分の指標（指標番号 8、12～13）については、国立大学全体の指標のため、学部・研究科等ごとの現況調査表の指標には活用しません。

※ 部分の指標（指標 11）については、研究活動の状況に関する指標として活用するため、学部・研究科等ごとの現況調査票（教育）の指標には活用しません。